

日本各地で学校・園庭ビオトープが盛んに活用されている。ここでは、過去に全国学校ビオトープ・コンクールで受賞した事例の中から、子どもたちや保護者、地域の人々とともに汗をかき、知恵を絞り、目をかがやかせながら取り組んでいる学校・園庭ビオトープを紹介しよう。

千葉県



千葉県いなげ市立稲毛第二小学校

環境NGOや地域住民の協力を得てつくられた「いのちの森」。その中にあるせせらぎには、メダカがおよぎ、昆虫や野鳥が集まってきている。つくった後も、地域のNGOが中心となって、子どもたちの活動を支えている。

環境NGOや
地域の人々が
子どもたちのために



お父さんお母さんたちが
子どものために



板橋区立蓮根第二小学校

近隣にある荒川と自然のネットワークができるよう、植える植物などは荒川の自然をお手本にした。つくる際や定期的な管理を、保護者による「ビオトープをつくろう会」が大きく支える。各学年の授業で学校ビオトープを活用している。



子どもたち、
先生、PTA、
みんな参加



松本市立清水小学校

「せせらぎ」と名づけられた学校ビオトープを継続的に活用するために、教員間ではカリキュラムを研究する体制づくりを、PTAでは「せせらぎサポートの会」を別途設けるなど、推進体制を整えている。子どもたちも、環境改善や「せせらぎ」のよさについて新聞を通して地域に伝えるなどの活動を展開中。



1——夢の学校・園へ

自然と共存する夢の学校・園

人と自然との共存したまちづくりに向けて、これからの土地利用のあり方を考えることが大切である。世界各国では、川のコンクリート護岸をはがして自然の川に戻したり、ダムを取り除いたり、農地の一部を草地や湿地に復元するなど、自然を取り戻すための取り組みが着実に進んでいる。

そうした中、次世代を担う子どもたちを育てる学校・園では、日々の生活の中で、子どもたちの自然に対する価値観や知識、技能が育つように、その敷地内で人と自然が共存できる環境を整えることが大切となる。学校・園庭ビオトープにとどまらず、すでにある校舎・園舎や体育館、プール、運動場、花壇、農園など、さまざまな空間で、子どもたちと生きものが出会える創意工夫を施していきたい。

また一歩外に出て、地域の自然も教材として活用し、さまざまな教科や活動を通して、子どもたちの豊かな感性や自然との共存を大切に思う心を育てたい。

さまざまな生きものがくらせる学校・園へ

学校・園庭ビオトープをつくり育てていくときのポイントには、次のものがあげられる。

- ①地域の生きものが訪れやすいようにする
 - ・地域のビオトープを手本とする。
 - ・敷地内にすでに自然がある場合は、必要に応じて改善を図る。
 - ・周辺のビオトープとネットワークが図れるように工夫する。
 - ・敷地内でも自然がつながるように工夫する。
 - ・生きものがくらす場所と私たちが観察する場所を分ける（できれば子どもたちがルールをつくるとよい）。
 - ・小動物がくらせるようなしかけをつくる。
- ②教材として効果的に活用する
 - ・小学校以上であれば、子どもたちがビオトープをつくり育てる当事者であることを意識させる。
 - ・地域にも開放され、地域の人々が自由に訪れ、地域の人々の憩いの場、環境学習の拠点としても機能させる。



③地域と協働する架け橋として利用する

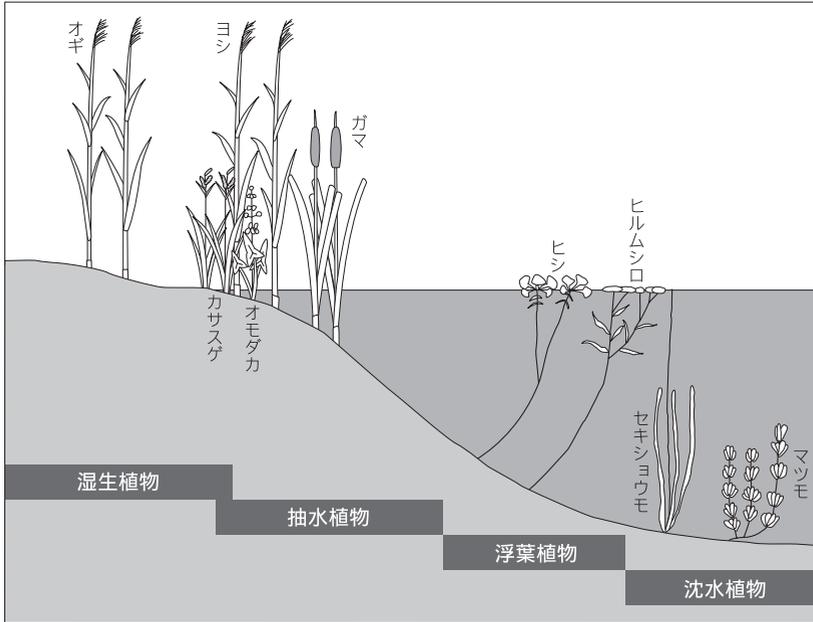
- ・学校・園庭ビオトープを、地域の人々や環境NGOとの交流の場とする。
- ・学校・園庭ビオトープを拠点に、地域全体で子どもたちを育てる意欲の向上と体制をつくる。
- ・学校・園庭ビオトープを拠点に、地域の自然を愛する心の輪を広げる。
- ・学校・園庭ビオトープを通して、子どもたちの地域交流や社会参加を進める。
- ・地域の人々が学校・園庭ビオトープでの取り組みに関わることにより、教職員の異動などに左右されることなく、継続的な取り組みができるようにする。
- ・卒業・卒園した子どもたちが、引き続き下級生の面倒をみるなど、交流できる場とする。

以上、学校や園、地域の特色にあわせて実現可能なところから、ゆっくりと取り組んでいきたい。

次に、小学校を例に、人と自然との共存が求められる時代にふさわしい夢の学校を、市街地の場合と郊外の場合に分けて、紹介しよう。



図6-1 さあ、みんなで学校・園庭ビオトープをつくろう！



湿生植物	オギ、カサスゲ、タネツケバナ、ミゾバナ、マツバイ、ミゾカクシ、イボクサ
抽水植物 <small>ちゆうすい</small>	ヨシ、ガマ、コガマ、ヒメガマ、マコモ、フトイ、サンカクイ、オモダカ
浮葉植物	ヒシ、ヒルムシロ、トチカガミ
沈水植物	セキシヨウモ、クロモ、マツモ、エビモ、ホザキノフサモ

図6-8 水生植物の種類

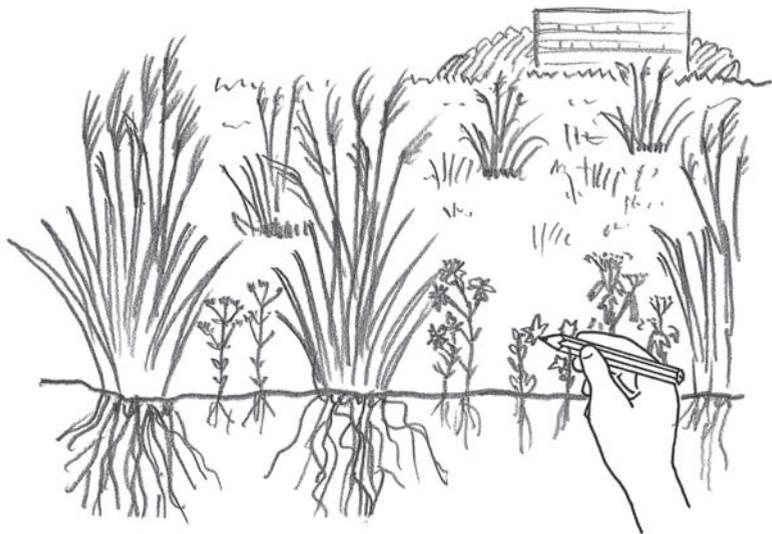


図6-9 草地のタイプを考えよう

草地を設計する

●どのような草地にしたいかを定める

「野草園」というと、今まで行っていた除草作業をやめて、そのまま放置する中で自然に生える野草を観察する場所というイメージがないだろうか。ひと口に草地といっても、さまざまなタイプがある。

訪れてほしい昆虫と野草との関係や、地域にある草地のタイプ、高度経済成長長期以前にあった草地の様子などを調べながら、どのようなタイプの草地をつくるのか決めていきたい。次にその例を示す。

①秋の七草（※）が生えるススキの草地はいかが？

秋の七草の多くは、その内の一つであるススキの草地に好んで生える。しかし、わらぶき屋根が減り、牛馬に代わって、耕運機が普及したため、人為的に草地を維持することがなくなり、ススキの草地は激減し、かつては身近に見られた秋の七草も、クズ以外はめっきり見かけなくなった。そのため、ギンイチモンジセリなど、ススキの草地でくらす生きものの多くにも絶滅への危険信号が点灯し始めている。